

『努力する人間になってはいけない：学校と仕事と社会の新人論』

芦田宏直著／ロゼッタストーン

著者は専門学校の校長、大学の学長を歴任した教育者で、本書は入学式や卒業式のあいさつの言葉を編集したものである。その教育者が何という事を書くのか?!と思わせるような題名で、「努力しないで〇〇を得る方法」とか「簡単に〇〇に成功する方法」といった安物のビジネス書の様な印象であるが、かなり立派な内容である。

そもそも論であるが、「努力は買ってでもしろ」「努力に勝る天才はなし」と「努力」に関する日本語のことわざは数多くある。それどころか「努力すらしなくせに」という言葉が象徴するように、日本では「努力」が重視され、尊ばれる文化に住んでいる。

本書の題名では「努力」をしてはいけないというが、はどういう事か？
著者がいうには、世の中には次のような人がいる。

- 1つ目は、怠け者だけれども目標を達成する人
- 2つ目は、がんばり屋で目標を達成する人
- 3つ目は、がんばり屋で目標を達成できない人
- 4つ目は、怠け者で目標を達成できない人

世間では4番目が一番ダメな奴とレッテルを張られ、1番目が最も嫌われると言ったところだろうか。

しかし、良く考えてみよう。給料を払う側から見れば、どうか考えてみれば一目瞭然である。努力しようがしまいが、目標を達成する人が望ましい。なぜならば期待した結果が得られなければ、企業は成り立たない。例えば、1000万円の投資で2000万円の利益が上がったか、それとも1000万円の赤字になったかを比較すれば明らかである。努力したかしなかったかに拘わらず、利益を出した方が優れている。たとえ上司は許してくれたとしても、株主や銀行は容赦しないだろう。

では、一番困る存在は誰か？ここで著者は言う。これは3番目である。「結果でなくプロセスが重要」といっても、結果につながらないプロセスは価値がなく、目標達成を偶然にせず、継続的なものにすることが重要である。さらに著者は続ける。

「こういう人は上長や周辺の人言うことを聞きません。なぜか。怠けるつもり

もないし、他の社員が遊んでいるときも仕事をしているし・・・」最後には、「これ以上がんばることなどできない。」こういう人は、努力が足りないから目標達成していないと思い込んでいる。だから、達成につながらない努力をすることになる。これはある意味、エンジンは強力だがハンドルがついてない車に乗っているようなものである。努力というアクセルを踏み続けることで、同じところをくるくると回りながらタイヤから煙もくもくとドリフトし続けている。にもかかわらず、目標に近づいていると思っているのは本人だけで、そのうち評価されないと絶望感に陥る。

この無意識の努力評価主義は実に厄介で、様々なところに現れてくる。成績にも口を挟んでくることがある。努力点をください、レポートを提出したのだから成績がつくのは当たり前だという感覚である。(本当に努力したのか疑問が残るものが大半だが。)

この努力論批判に続き、就職活動への心構え、就職してからどのように仕事を覚えていくか、原点の学校教育論へと続いていく。

私が学生のときに、こういう説教を聞いたかったな。

執筆者紹介

綿引 宣道

情報・経営システム工学専攻准教授。専門領域は、経営学、経営社会学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『努力する人間になってはいけない：学校と仕事と社会の新人論』 芦田宏直著 ロゼッタストーン 2013年 3,024円

[ブックガイド目次へ](#)